カウントダウン～【レインキス】番外編～

七瀬　夏葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カウントダウン～【レインキス】番外編～

【Ｎコード】
Ｎ８３２４Ｐ

【作者名】
七瀬　夏葵

【あらすじ】
＜予告＞

年の瀬になると思い出す。
大切な、ただ一度の大晦日を・・・。

次回【レインキス】
番外編「カウントダウン」

思い出はいつも、胸の中に・・・・。

（前書き）

＜作者より一言＞

同作者の小説【レインキス】の番外編です。
愛読して下さった読者様への感謝を込めて書きました。
本編【レインキス】をご存じない方は内容が解らないかもしれません。
もし宜しければ【レインキス】本編をお読み頂けると大変嬉しく存じます。
拙い文ではありますが、『雨が彩る恋物語』の番外編。
どうぞお楽しみ下さいませ☆

＊＊＊＊＊＊＊

年の瀬になると思い出す。
彼女と過ごした、一度だけのあの大晦日を――・・・。

・・・【レインキス】番外編・・・
～【カウントダウン】～

――12月31日。
俺は彼女と一緒に未だ終わらぬ大掃除に追われていた。

「おにいちゃ～ん、そっち終わったぁ？」

さっきまでガスレンジを磨いていた彼女が、何やら達成感に満ちた笑顔で居間へとやって来た。

「あー・・・まだ。押し入れのトコ、手つかずなんだ」

「あ、そこはいいよ！どうせ物いっぱい入ってるし！！」

慌てたように言い、彼女は「手伝うね」と雑巾を片手にこちらへとやって来た。
畳と床の間を手分けして雑巾がけすると、俺達はふぅと息を吐いた。

「これで大体終わりかな。結構かかったな～」

「ううっ、ごめんなさい！あたし、お掃除だけは苦手で・・・・」

洗濯も料理も問題なくこなす彼女だが、唯一掃除だけは絶望的にダメだった。
彼女の『片付け』は正直な話、単に『どかす』だけの一時的な物であり、根本的に『片付ける』事が出来ていない。
一度それを指摘したら、「え！そうなの！？」と本気で分からないという顔をされた。
普段の彼女の部屋の有様も結構酷いのだが、話を聞く限りでは、彼女の実家の様子は更に凄まじいようだ。

「まあ、誰にでも得手不得手はあるから。気にすんな。結婚したら俺が掃除すりゃいい話だし」

すると彼女は途端に頬を赤く染めてうつむき、小さく「ありがと」と呟いた。

（うっわ、もうホント、反則だよ、こういうの！）

思わず抱きしめたい衝動に駆られた。
普段は強気で元気なのに、たまに見せるこういう所が可愛くてたまらない。
これも俺が彼女を好きになった一因かもしれない。

「沙織、ちょっとこっちおいで」

「ん、何？」

トコトコと寄って来た彼女をギュッと抱きしめて唇を塞いだ。

「んっ――――・・・・！」

痺れるような感覚の中、彼女の口から漏れる甘い声を耳にしつつ、
歯列を割って奥へと舌を滑り込ませる。
温かい感触が絡み合い、クチュリと淫媚な音をたてると、彼女の身
体からガクリと力が抜け、心地よい重みが預けられた。

「んっ、ふっ――――・・・・・・！」

首に回された腕がふるふると震えるのを感じながら、その背に回し
た腕に力を込める。
伝わる熱が一層増し、駆け上って来る甘い痺れに酔いしれていく。

――――ああ、もう・・・・・。

「はぁ・・・・・・」

腕の中の彼女は、ようやく解放された艶やかな唇から甘い吐息を漏
らし、濡れた瞳で俺を見つめた。

「・・・・沙織・・・・可愛い・・・・・」

微笑みながら言うと、彼女はちょっとだけ恨めしそうな目で俺を見
て、小さく「・・・・ばか」と呟いた。
それがまた愛おしくて、そのままギュッと強く抱きしめた。
こんなふうにまた誰かを好きになれるなんて、“あの時”には思わ
なかった。

――――――カヨ・・・・・・。

久しぶりに思い出した名前に、少しだけ胸が痛む。

けれどそれは、すぐに目の前にある甘く愛しい熱に溶けるように消えた。
今この胸にあるのは、失った過去の痛みじゃなく、狂おしいほどの熱情だけだ。

「・・・・愛してる・・・・・」

言葉だけじゃ足りなくて、もう一度彼女の唇を塞いだ。

「・・・・・んっ・・・ふっ・・・・・」

甘い吐息が漏れ、熱を帯びた彼女の身体が腕の中でふるふると震えた。
その柔らかく小さな身体をギュッと抱き寄せ、俺は熱に身を任せた。
互いに互いの熱を欲し、与え、与えられ、果ててはまた、熱を増していく。

「・・・・あっ、もう・・・・！」

何度目か分からない熱の果てを迎え、俺の腕の中、彼女はビクリと跳ねるように身体を逸らせ、その全てを俺に委ねた――・・・・。

――――・・・・・・。

「・・・・すっかり暗くなっちゃったね」

窓の外を見つめ、彼女は静かに言った。

「ああ。あと少しで今年も終わりだ」

テレビをつけると、ちょうどキャスターが除夜の鐘の聞こえる会場で生中継をしている所だった。
カウントダウンが始まり、やがてゼロの声と共に花火があがった。

「あけましておめでとう」

「うん。おめでとう。今年もよろしくな、奥さん」

見る間に頬を紅く染めた彼女を抱き寄せ、その唇を塞いだ。
来年もこうやって、一緒にカウントダウンを迎えられるよう、願いながら・・・・。

（後書き）

＊＊＊＊＊＊＊

＜作者より一言＞

この度は小説【レインキス】番外編【カウントダウン】をお読み頂き誠に有難うございます。
連載終了後も【レインキス】を読んで下さる方、『アルファポリス』に投票して下さる方がお見えになるようで、作者として大変嬉しく存じます。
【レインキス】を愛読して下さる皆様に、この場を借りてあつく御礼申し上げます。
こんな拙い七瀬の作品を読んで下さって、本当に有難うございます！！
皆様のおかげで連載終了後【レインキス】は通算ＰＶ２８，０００、ＵＵ５，０００を突破という、七瀬作品の中では稀に見る素晴らしい快挙を成し遂げました。
連載最終日の最終回当日に至っては、アルファポリスの恋愛部門１００位にランキングインするという名誉まで頂きました！
まさに読者の皆様のおかげであります。
読者の皆様、本当に本当に有難うございました！！！！
この作品【カウントダウン】は、読者の皆様に感謝を込めて、もう一度【レインキス】の世界を楽しんで頂けるよう書き上げました。
拙い文ではありますが、少しでも皆様にお楽しみ頂けれていれば幸いです。
皆様、本当に有難うございました！
今年も本当に後残すところ僅かとなりました。

皆様、どうかお身体に気をつけて、良い年末年始をお過ごし下さいませ。

心より感謝を込めて。

七瀬　夏葵

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8324p/

カウントダウン～【レインキス】番外編～

2011年1月3日21時37分発行